

## 後記

本年度の国文学大会では公開講演ゲスト講師として、纈纈くり氏をお招きした。神田神保町はいままでもなく世界一の規模を誇る古書店街である。その中にあっても抜きん出た伝統と歴史を持つ大屋書房の四代目を名乗ることを正式に許された纈纈氏は、本学国文学科の卒業生である。卒業後、ご尊父にあたる三代目店主のご指導のもとで近世の和本、浮世絵、古地図等を扱う古書籍業の専門家として研鑽を重ね、現在では店主の心強い支えとして、また男性中心の世界だった神保町古書店街全体の新しい流れを象徴する存在として幅広く活躍されている。豊富な画像を駆使したご講演は、本格的な古書店というものに縁遠かった学生たちに新鮮な感動と興味を呼び起こした。画や書の真贋を瞬時に見極めるために「日頃から眼を鍛えておく」のだという。ややもすれば情性に流されがちな教員として、襟を正される思いがした。講演終了後、実物の和本や絵巻の周りに学生たちが集まって手に取って閲覧したり、質問したりする時間が長く続いたが、本学の国文学大会ではかつて見られなかった光景である。

\*

前号、前々号に続いて林達也名誉教授から玉稿をいただくことができ、本号も例年とほぼ同じボリュームを維持することができた。本年度新しく学科専任スタッフとしてお迎えした倉田

容子先生は、本号が『駒澤國文』へのデビューになる。倉田先生はジェンダーとエイジングという視座から近現代文学への斬新なアプローチを試みた一連の論考で学会の注目を集めている気鋭の研究者であり、また教場で先生の講義を聴いて眼を開かれたと語る学生は多い。

\*

その倉田先生に、着任早々『駒澤國文』の編集をお引き受けいただいた。本号の編集委員は、学科最年長者から最年少者までの幅広い年齢分布のトリオとなった。学科史上初めての現象かもしれない。新時代の予感である。(T)

編集委員

高田 知波

田中 徳定

倉田 容子